

イヌワシ保護回復事業計画

本計画は長野県希少野生動植物保護条例に基づくもので、「保護回復事業」とは指定希少野生動植物について、その個体（卵及び種子を含む。以下同じ。）の維持又は保護増殖を促進するための事業、その個体の生息地又は生育地及びこれらと一体となった生態系の保全、回復及び再生をするための事業その他保護を図るための事業である。

イヌワシは平成 17 年 3 月 22 日付けで特別指定希少野生動植物に指定された脊椎動物（鳥類）で、県民主体の保護活動が行われており、今後も期待される種である。

1 種の説明

（1）種の特徴

イヌワシ：*Aquila chrysaetos*

全長約 81cm（雄）、89cm（雌）で、翼を広げると 170～210cm にもなる黒褐色の大型猛きん類である。翼は幅広く長い。森林の樹木の少ない開けた環境などでノウサギやキジ、ヘビなどをとる。通常 2 個の卵を産み、2 羽の雛が孵化するが、兄弟間の争いにより 2 番目の雛の死亡率はきわめて高い。イヌワシは古くから日本人によく知られた存在であり、「鷲」や「天狗」のつく地名は県内にもよく見られる。



イヌワシ成鳥雄（撮影：片山磯雄氏）

（2）レッドデータブックカテゴリー

長野県版：絶滅危惧 IA 類

環境省版：絶滅危惧 IB 類

2 現状

（1）県内における生息状況

県内の広い地域に分布しているが、その個体数は県内では 30～40 つがいと推測される（長野県 2004）。

国内では北海道から九州に 175 つがいが確認されており、個体数は約 500 個体程度である。

県内のイヌワシの詳細な生息状況は、生息地および営巣地の確認状況にもとづいて整理すると下記のようなになる。

表 1

分類	状況	箇所数
A	ペアと営巣地が判明している	24 箇所
B	ペアを確認しているが営巣地が判明していない	10 箇所
C	過去にペアや営巣地の確認情報はあるが、現在確認されていない	14 箇所
D	聞き取りや文献による情報のみで、現在確認されていない	2 箇所

分類 A～D を合計すると、過去の生息も含めた県内のイヌワシの生息地は 50 箇所になる。そのうち C は、かつて生息していたにもかかわらず、現在は確認されていない場所である。また、D についてもかつて生息していた可能性が高い場所である。こうしたことから、長野県内でこれまでに記録のある生息地の 16 箇所（32.0%）でイヌワシが確認されなくなっている。

（2）県内における繁殖状況

営巣地が確認されている 24 箇所のうち 22 箇所における、1975 年から 2005 年までのイヌワシの繁殖状況について見ると、31 年間の平均繁殖成功率は 31.4% である。平均繁殖成功率を約 10 年単位で見ると、下記のとおりである。

表 2

期間	平均繁殖成功率
1975 年から 1985 年	40.3%
1986 年から 1995 年	34.0%
1996 年から 2005 年	20.6%

この表からわかるように、長野県におけるイヌワシの平均繁殖成功率はこの 30 年間で急激に低下している。なお、全国的にも同様に平均繁殖成功率が低下している傾向が見られている（日本イヌワシ研究会 1997、2001）。

繁殖状況の確認年数が 5 年以上の巣についてみると、各つがいの平均繁殖率は 0.0% から 66.7% の幅がある。平均繁殖率が 40% をこえるものもあれば、定着していながらこれまで一度も繁殖成功に至らない巣がある。

海外でのイヌワシの繁殖成功率は 50% 前後が多いことが報告されている（Watson 1997）。それに比べると、最近の長野県繁殖成功率は明らかに低く、個体群の維持が困難となるのではないかと危惧されるほどである。

（3）その他

個体の取扱いに関する規制についてみると、本種については、長野県希少野生動植物保護条例のほか、絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律（種の保存法）、鳥獣の保護及び狩猟の適正化に関する法律、文化財保護法等でも規制の対象となっている。しかしながら、今なお違法飼養などの摘発があるなど、捕獲圧は無くなってはいない。

なお、現在本種については、種の保存法に基づく保護増殖事業が行われている。
また、現時点では外来種の影響は確認されていない。

3 課題

県内でこれまでに記録のある生息地のうち 16 ヶ所でイヌワシが確認されなくなった理由や繁殖成功率の低下の理由としては、餌不足、森林伐採、スキー場やダム等の開発、工事等の騒音、カメラマンの接近、密猟、農薬や化学物質、重金属の蓄積や営巣地付近でのハングライダーやヘリコプター、ラジコン飛行機等の飛行による影響など、さまざまな要因が考えられるが、特に次の2つの要因の与える影響が大きいと言われている。1つは、繁殖期における営巣地周辺での開発や工事及び人の営巣地付近への不用意な接近によるものであり、もう一つは1960年代の拡大造林事業にともなう林種転換や里山の管理停止による、狩場の消失や餌動物の減少である。

全国におけるイヌワシの繁殖失敗原因として、開発・工事などの影響が34%、営巣地への人の接近やハングライダーやグライダーなど乗り物の接近が17%、無精卵や親の入れ替わりによるものが22%、えさ不足が11%、巣の不具合と巣内事故が5%、ツキノワグマやカラスによる被害が5%などであり(日本イヌワシ研究会, 2003) 特に繁殖期における営巣地周辺での開発や工事による影響が大きいとされている。

こうしたことから、まず営巣地周辺において繁殖等に影響を及ぼす可能性のある行為を抑制するため、開発等の影響の低減と不用意な営巣地への接近を防ぐことが急務である。

このため、正確な生息情報を広く周知していく必要があるが、一方でこうした行為は、密猟やカメラマンの接近を招くことにつながる危険性あり、生息情報の適正な取扱いが必要となる。

一方、海外における長期的な研究でも、イヌワシの繁殖成績は餌量との間に相関があるという報告もあり(Watson 1997 ほか)、ノウサギなど餌動物の生息環境である森林の管理にも注意を払う必要がある。また、北上高地においても1995年以降繁殖成功率の顕著な低下が見られ、その一部はイヌワシの好適な採餌環境の減少で説明できると考えられている(由比ほか 2005)。

4 事業の目標

1981～1985年のイヌワシの全国の平均繁殖成功率は47.1%であり(日本イヌワシ研究会 1997, 2001)、海外で報告されているイヌワシの繁殖成功率も50%前後が多い(Watson 1997)。このことから、現在の繁殖成功率は明らかに低く、このままでは個体群の維持が困難になると考えられる。そのため、本種が自然状態で安定的に維持されるた

めには、1980年代と同じ繁殖成功率(約50%)程度まで回復することが求められ、この数値まで繁殖率を回復することを最終的な目標とする。

このため、まず、これ以上の繁殖率の低下を防ぐことを当面10年間の課題とする。

5 事業の区域

長野県全域

6 保護回復事業のために緊急に取り組む事項

(1) 開発等の影響の低減

繁殖失敗の原因として、開発等の影響が高い比率を示している報告もあるなど、本種の生息地周辺における、生息に影響を及ぼすおそれのある土地の利用及び開発の実施に関しては、本種の生息に必要な環境条件を確保するため、その実施主体による配慮がなされる必要がある。

このため、県内において統一的な配慮がなされるよう、本種に対する具体的な配慮方法に関する指針等の作成を進める。

(2) 生息情報の収集・管理・利用

上記対策の実効性を確保するためには、県内における本種の分布情報をもとに、配慮が必要となる地域を周知し、計画の初期段階で事業者等の配慮がなされる必要がある。しかし、一方では分布情報の公表は捕獲圧等の増加の要因となる危険性もある。

このため、これまで様々な機関において収集されているデータを一括して管理し、必要に応じ利用できる体制を整備するとともに、生息情報の取扱いに関する指針等を定め、情報の流出防止を図る。

(3) 生息環境の改善

イヌワシの採餌行動は、過密林分では困難といわれており、開けた森林環境を整備するため、間伐を推進する必要がある。

このため、関係団体と協議したうえで、その生息地における効果的な間伐の方法や時期を定める。

7 情報収集とモニタリング

本種の分布、行動圏、採餌行動等の生息状況を把握するとともに、生息環境に悪影響を及ぼす要因をより詳細に把握するために、可能な限り定期的なモニタリングとともに、本種及び本種を取り巻く状況に関する情報の収集及び実態の把握に努める。

8 地域との協働

本種の分布情報をもとに、計画段階で事業者等へ配慮を求めていくためには、分布情報の継続的な収集と更新が不可欠であり、地域の観察者等との連絡体制の整備に努める。

また、本種の保護回復事業を実効あるものとするためには、各種事業活動を行う事業者、国及び地方公共団体並びに関係地域の住民を始めとする多くの方の理解と協力が重要となる。

このため、本種の生息状況及び生息環境、保護の必要性等に関する普及啓発を行うとともに、地域住民等による保護回復事業をより効果的に推進するため専門家による技術的な支援等が図られるよう努める。

なお、事業の実施については、県、市町村、NPO 及び民間団体等の幅広い主体によって推進する。

9 スケジュール

概ね 5 年毎に、この事業による効果を検証、評価し、保護回復事業計画の見直し等について検討する。

10 文献

- ・長野イヌワシ研究会 (2006) 希少猛禽類イヌワシの生息状況報告書.
- ・日本イヌワシ研究会 (1997) 全国イヌワシ生息数・繁殖成功率調査報告 (1981-1995). *Aquila chrysaetos* 13: 1-8.
- ・日本イヌワシ研究会 (2001) 全国イヌワシ生息数・繁殖成功率調査報告 (1996-2000). *Aquila chrysaetos* 17: 1-19.
- ・日本イヌワシ研究会 (2003) イヌワシにおける繁殖失敗の原因 (1994-2000). *Aquila chrysaetos* 19: 1-13.

- ・長野県 (2004) 長野県版レッドデータブック～長野県の絶滅のおそれのある野生生物～(動物編). 長野県, 長野.

- ・ Watson, J (1997) *The Golden Eagle*. T & AD Poyser, London.
吉井正 (監)・三省堂編修所 (編) (2005) 三省堂世界鳥名事典. 三省堂, 東京.
- ・ 由比正敏・関山房兵・根本理・小原徳応・田村剛・青山一郎・荒木田直也 (2005) 北上高地におけるイヌワシ *Aquila chrysaetos* 個体群の繁殖成功率の低下と植生変化の関係. 日本鳥学会誌 54: 67-78.

11 関係者

長野県希少野生動植物保護対策委員会

天木喜代司、小口幸子、中村浩志、中村寛志、中山洌、平沢伴明、藤山静雄

両角源美、柳沢昭夫、柳沢盛一、横内文人、吉田利男、吉田正人

長野県希少野生動植物保護対策委員会 小委員会

中村浩志、両角源美、吉田利男

長野県希少野生動植物保護対策委員会 小委員会 協力者

片山磯雄

長野県環境保全研究所

堀田昌伸